

日本語フィラーと中国語フィラーの機能に関する対照研究

葛, 欣燕

<https://doi.org/10.15017/4060252>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	葛 欣燕			
論文名	日本語フィラーと中国語フィラーの機能に関する対照研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松村 瑞子
	副査	九州大学	教授	山村 ひろみ
	副査	九州大学	教授	井上 奈良彦
	副査	九州大学	准教授	劉 鸞
	副査	元九州大学	准教授	因 京子

論文審査の結果の要旨

本論文は、言葉産出上何らかの障害が生じる時に挿入される、「あの一」「えーと」「まあ」等、フィラーと呼ばれる言語表現に注目し、日本語フィラーと中国語フィラーの機能を包括的に比較対照させたものである。出現位置と機能との関わり、場面の改まり度と機能との関わりという2つの側面から、日中フィラーの用法を対照させた。さらに、日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語フィラーの使用実態を比較することで、本論文の結果を日本語教育へ応用する可能性を探った。

第Ⅰ部(第1章～第3章)では、研究の目的、先行研究の概観、本研究の立場、フィラーの定義、フィラーの機能の分類、分析資料について述べた。

第Ⅱ部(第4章～第5章)では、出現位置、場面の改まり度、機能から日中フィラー使用の特徴について分析・考察を行った。第4章では、フィラーの機能を「発話内容・構成調整機能」と「対人関係調整機能」に分け、さらにそれぞれに下位項目を立てて、出現位置と場面の改まり度との関わりについて分析を行った。第5章では、第4章と同様の側面から中国語フィラー使用の特徴を論じた。機能と出現位置の関わりについては、日中両言語から同様の結果が得られた。つまり、発話頭に位置するフィラーは「言葉探し」以外に、主に良好な人間関係を維持しながらコミュニケーションを円滑に遂行する機能があった。発話中に位置するフィラーは、発話の構成、談話の展開及び聞き手への配慮を行うという機能があった。発話末に位置するフィラーは主に「言葉探し」として使用されていた。場面の改まり度と機能の関わりについての日本語フィラーの特徴としては、フォーマルな場面では「発話継続表明」、「和らげ」、「ためらい」の使用率が高かったが、インフォーマルな場面では「情報の曖昧化」、「共通理解」の使用率が高かった。一方、中国語フィラーの特徴としては、フォーマルな場面では日本語と同様の結果が得られたが、インフォーマルな場面では日本語には観察されなかったフィラーによって発話権を奪取する現象が見られた。

第Ⅲ部(第6章～第7章)では、第4章と第5章の分析結果に基づき、先ず両言語のフィラー使用の相違点について考察を行った。その結果、「発話内容・構成調整機能」のフィラーについては、両言語とも、どの場面でも発話頭と発話中の使用率が高いという結果が得られた。一方、「対人関係調整機能」に関しては、日本語フィラーの使用は「聞き手中心」であるのに対し、中国語フィラーの使用は「話し手中心」であった。また、日本語フィラーは「共通理解」の使用率が高い一方、中国語フィラーは「発話権奪取」の使用率が高いということが明らかになった。次に、日中接触場面のデータに基づき、日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語フィラーの使用実態を明らかにした。その結果、学習者のフィラーには過剰使用や使用する種類の偏り等の問題が見られた。また、

対人ストラテジーとして母語話者ほどフィラーをうまく使えないことが明らかになった。第7章では、本論文の要旨、研究の意義及び今後の課題について述べた。

本論文の意義としては、先ず量的・質的分析を通じて、談話管理の観点から日本語フィラーと中国語フィラーの使用実態について対照分析を行い、これまで研究対象とされてこなかった日中フィラー全体に関する機能上の相違点を体系的に示した点にある。次に、膨大なデータの分析に基づき、中国人日本語学習者の日本語フィラー使用の問題点を明らかにし、日本語教育への応用法を提案した点にある。会話ストラテジーとしてのフィラー使用を効果的に指導すれば、中国人日本語学習者のコミュニケーション能力の向上に貢献できる。

以上より、本論文は博士（学術）の学位に値すると認められると判断した。